

## 特色ある共同利用・共同研究拠点 期末評価結果

大学名	立命館大学	研究分野	文化情報学
拠点名	日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点		
学長名	仲谷 善雄		
拠点代表者	細井 浩一		

### 1. 拠点の概要 ※期末評価報告書より転記

#### [拠点の目的]

平成26年度は、人文学分野のデジタル・ヒューマニティーズ (DH) 化、あるいは応用的な研究のためのデジタル技術導入が検討される、まさにニーズの頂点となると予想される。そこで、アート・リサーチセンター (ARC) は、このニーズの高まりを受け、国内外の人文学研究者と情報学研究者との共同プロジェクト、あるいは人文学・文化研究に情報技術を活用した応用的研究を飛躍的に活発化させるための共同プロジェクトを多数組織することを目指し、これまでの活動をより発展させ、広く門戸を開いた活動へと切替えていくことを決意した。

まず、本申請拠点では、人文学分野の研究プロジェクトが、DH 型研究手法を取り入れた人文学の応用型研究を積極的に進められるように拠点の環境を準備する。これまでのように個々のプロジェクトが高額な予算を準備して外注したり、デジタル・アーカイブやWeb 公開の設備や機材を準備したりするのではなく、共同で設備や備品を活用できるようにする。

また、本拠点が持つ豊富なデジタル・アーカイブ研究の経験やノウハウを共同研究者らと共有化し、人文系の研究者にとって過重な負担となるデジタル技術を効率よく取り入れて活用できるよう、設備だけでなく、人的な配備を行う。

このような研究環境の提供によって、日本文化資源のデジタル・アーカイブを飛躍的に拡大させ、構築される巨大データベース (DB) が人文学研究の底上げに寄与しうる活発な共同プロジェクト研究を推進する。

なお、本拠点では、闇雲に人文学のすべての分野を対象とするのではなく、ARC が蓄積してきた日本文化を対象とするデジタル・アーカイブに焦点を絞ることで、研究成果を闡明し、研究プロジェクト相互の成果物を有機的に連動させ、相乗的な学術効果をプロデュースする。そして、むしろ日本文化以外の分野にも応用できる具体事例となる共同の研究プロジェクト、ならびにデジタル・アーカイブを数多く成立させることを目指す。

そして、ひいては、DH 型人文学改革の先導的な共同利用・共同研究拠点の1つとなることを目標とする。

#### [拠点における成果及び目的の達成状況]

共同利用・共同研究拠点として、研究環境 (サーバ環境・デジタル化機器、活用ノウハウ提供体制等) の整備を行い、多くの共同研究課題・共同利用者にその環境を提供することができた。人文学系の共同利用・共同研究拠点においては、数件の共同研究課題の採択にとどまる例が多いのに比して、本拠点は各年度とも研究費配分型の課題だけでも採択数が10件を超え、平成27年度に開始した研究設備・資源活用型を合わせれば、年間20~30件程度の共同研究課題が活動した。さらに、情報・ネットワークインフラを持たない所蔵機関やそこでは、人文学系研究者が情報学系・工学系の研究者や企業と連携して研究活動を進めており、極めて活発な研究展開に成功した拠点といえる。

また、世界有数の美術館の日本美術コレクションのデジタル化や当該機関との共同研究プロジェクトにおいて、本拠点は大きな貢献、成果を出した。結果、この6年間に、海外の日本研究機関からのデジタル・アーカイブのサポートに対する要請はますます強まり、本拠点が提案する海外サポート型デジタル・アーカイブ手法 (国際型ARCモデル) をより一層普及させ、多くの機関において日本文化資源デジタル・アーカイブを促進することができた (本年度までの実績: 海外12ヶ国、52所蔵機関でデジタル化・共同研究を実施)。海外組織は、本拠点が用意する資源管理DBを利用でき、それにより博物館・図書館の日常業務を進めるとともに、次第に本拠点のシステムを使って収蔵品の一般公開を始めている。その数は述べ54機関にのぼった (国内機関および個人を含む)。

以上のように、この6年間の活動により、デジタル環境下においても比較的研究手法が目立った革新のなかった歴史・文化・芸術分野において、デジタル・アーカイブによるDH型研究を促進し、人文学の新しい研究手法と新次元の研究環境を提供することに成功し、かつ日本文化資源のデジタル・アーカイブは飛躍的に拡大した。上記の目的は十分に達成できたと考えている。

[機能強化支援が拠点の当初目的の達成に与えた効果]

本拠点においては、当初目的の達成のために、拠点のデジタル・アーカイブの研究推進をサポートし、共同研究課題を支援する体制として「テクニカル・サポートボード」を設置しており、技術系と研究系の研究員を当該予算によって雇用した。また、拠点活動と連動した若手研究者育成を進めるため、当該予算によってRAを雇用し、拠点活動や共同研究課題に参画させ、研究実践力の育成を行った。これらの若手研究者は拠点活動の推進に大きく寄与した。また、当該予算によって共同研究のシーズとなる浮世絵・古典籍などの日本文化研究資源を整備し、DBを通じて利用可能とした。以上のように、人材面・拠点環境面の双方において、機能強化支援が決定的な役割を果たしたといえる。

## 2. 評価結果

(評価区分)

S：拠点としての活動が活発に行われており、関連コミュニティへの貢献も多大であると判断される。

(評価コメント)

当該拠点は、日本文化を対象とするデジタル・アーカイブによる人文学研究の先導的な拠点整備を目的とし、日本文化資源のデジタル・アーカイブ化や、人文系の研究者向けのデジタル・アーカイブに関する技術支援、構築したデータベースを活用した共同研究など、拠点としての活動が活発に行われており、関連コミュニティの発展に大きく貢献している。

特に、国内のみならず、海外の日本美術コレクションのデジタル化を進めるとともに、機能強化支援を有効に活用し、デジタル・アーカイブを活用した共同研究を支援する体制として「テクニカル・サポートボード」の体制の充実を図るほか、RAを雇用し、拠点活動や共同研究課題に参画させるなど若手研究者の育成にも取り組んでいる。

今後は、国際共同利用・共同研究拠点として、構築されたデジタル・アーカイブを活用した国内外の研究者との共同研究の実施などに留意しながら、拠点活動の一層の充実に取り組むことが期待される。